慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	時間と主観性
Sub Title	Time and subjectivity
Author	河野, 哲也(Kono, Tetsuya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2013
Jtitle	哲學 No.130 (2013. 3) ,p.87- 103
JaLC DOI	
Abstract	This paper aims at reexamining critically the psychological conceptof "time perception" from a philosophical point of view. Becausepsychology has implicitly presupposed Newtonian physics as its researchframework, it has been wrongly believed that there is theperception of time itself. On the other hand, James Gibson has correctlyclaimed that we should think events as the primary realitiesand of time as an abstraction from them. According to Gibson, timedoes not exist as such, but it is rather a concept abstracted from realities.Accordingly, events are perceived, but there is no time perception.Following and extending the line of Gibson's argument, Iwill conclude that the image of "time arrow" or "flow of time" is aharmful, misleading metaphor for understanding time and time perception.What really exists is only the perception of continual eventsand processes. It is a human being who demarcates the line betweenthe past and the present in a continual process in the world. Perceptionof the future is the perception of the potential in the world.So, perception of the past and that of the future is completely asymmetric.
Notes	特集：渡辺茂君・ 増田直衛君退職記念 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000130-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

時間と主観性

河　野　哲　也*

Time and Subjectivity

Tetsuya Kono

This paper aims at reexamining critically the psychological concept of "time perception" from a philosophical point of view. Because psychology has implicitly presupposed Newtonian physics as its research framework, it has been wrongly believed that there is the perception of time itself. On the other hand, James Gibson has correctly claimed that we should think events as the primary realities and of time as an abstraction from them. According to Gibson, time does not exist as such, but it is rather a concept abstracted from realities. Accordingly, events are perceived, but there is no time perception. Following and extending the line of Gibson's argument, I will conclude that the image of "time arrow" or "flow of time" is a harmful, misleading metaphor for understanding time and time perception. What really exists is only the perception of continual events and processes. It is a human being who demarcates the line between the past and the present in a continual process in the world. Perception of the future is the perception of the potential in the world. So, perception of the past and that of the future is completely asymmetric.

* 立教大学文学部

はじめに

本年二〇一二年年度の日本心理学会第七六回大会では，慶應義塾大学教授の増田直衛氏と明星大学教授の境敦史氏を企画者として，「「時間知覚」再考:「時間」とはいかなる事柄か」というワークショップを行った(9月13日，専修大学生田キャンパス)．境氏と埼玉工業大学の曾我重司氏が提題者として発表した後に，筆者が指定討論者として，「時間知覚は可能か」というタイトルのコメントを行った．このワークショップでは，「時間とはいかなる事柄であるか」という存在論と，「時間はいかに知覚されるか」という認識論とは不可分のテーマである，という共通認識のもとで，それぞれの発表がなされた．

筆者の専門は哲学・倫理学であるが，これまで筆者は，本塾の文学研究科の院生であった時代より，増田直衛氏から心理学に関する指導を受け，境氏と曾我氏とは心理学上の先輩として同じグループで研究を続けてきた．哲学と心理学の中間的領域，あるいは心理学の哲学を専門とする筆者には，増田氏を中心とするグループとの交流は常に得難い知的刺激の源泉であった．今回のワークショップは，そうした継続的な研究の一環である．本論は大会当日に行った筆者のコメントを詳論し，さらに過去知覚についての考察を加えた論考である．時間についての考察としては，まだ手をつけただけのまったく未完成な論考ではあるが，これをもって心理学と哲学の双方を橋渡す時間知覚論の端緒として，今後の研究に繋がれば幸いである．

1. 時間の哲学，時間の心理学

哲学は時間についてずいぶん昔から議論を続けてきた．筆者がそのすべての議論を熟知しているのではないことは言うまでもないが，それでも筆者の知っている代表的な哲学的な時間論にはひとつの中心課題があるよう

に思われる．それは，時間の客観性と主観性の問題である．

四・五世紀の教父哲学者であるアウグスティヌス（Augustine 1968）は，時間の不可解さを強調したことで知られていよう．彼によれば，神は永遠の存在であり，時間の中にはない．時間は被造物に固有のものであり，時間は人間の意識の生み出したものである．アウグスティヌスにとって時間はすべて主観的であり，客観的に実在しているのではないことになる．一九世紀末から二〇世紀初めというほぼ同じ時代を生きたアンリ・ベルクソン（Bergson 2001）とジョン・マクタガート（McTaggart 1908; 入不二 2002）もアウグスティヌス的問題を継承している．有名なベルクソンにおける空間化された時間と本来の時間性である持続の対比も，時間の客観性と主観性の対比を説いたものであると言える．近年，注目されているマクタガートの時間論でも，現在・過去・未来というA系列と，前後関係・順序関係としてのB系列という対比を用いているが，前者を主観的時間，後者を客観的時間と呼び変えても大過ないと思われる．マクタガートは，あらゆる出来事は同時に過去，現在，未来の特性を持つが，それは矛盾であり，したがって，A系列の時間は非実在であると主張する．これは，言い換えれば，過去，現在，未来という時間の主観性を主張したと解釈できるだろう（他方で，運動性のない前後順序は客観的であることになる）．

時間の客観性と主観性を巡る哲学の議論では，運動変化と時間をどのように位置づけるかと関係している．運動変化自体は，主観的な時間性から導き出されるのか，そうではないのか．確かに，時間においては何かが客観的に実在している．あらゆるものが主観的だとする観念論は奇妙である．他方で，時間における何かが主観的であるように思われる．以下では，この論点を，生態学的心理学の先駆であるジェームズ・J・ギブソンの知覚論を巡って議論することにする．ギブソンによれば，知覚とは探索行為である．知覚は，環境中の事象や事物を探索し，その情報をピック

アップする行為である．したがって，知覚は，実在世界の内的表象を形成する制作ではない．もし時間が知覚されるのであれば，時間は環境中に実在するはずである．これまで哲学者が苦しめられてきた客観的時間と主観的時間は，実在と知覚に関する関係を解きほぐすことで解決の糸口が見つかるのではないだろうか．ギブソンを手がかりとしながら考察を開始したい．

2. ニュートン的パラダイムとギブソンの時間

先に述べたように，何を知覚するかという認識論（知覚論）と，世界に何が存在しているかという存在論とは切り離して考えることができない．ある人が知覚について語れば，必然的に実在について語ることになる．心理学者の多くは，心理学の議論が必然的に存在論（形而上学）にコミットせざるを得ないという事実から目を背けている．ギブソンは，自らのラディカルな知覚論が，同時に形而上学における刷新をも要求していることに自覚的であった．

ギブソンは時間知覚について以下のようにきわめて明確に述べている．

> 時間の経過は等質でありかつ直線的であると仮定されているが，事象の流れは等質ではなく，部分部分で異なる．ニュートンは，「絶対時間，純粋時間，そして数学的時間はそれ自体で，それ自身の性質から，いかなる外界の事情とも関連せずに，均質に流れていく」と主張した．しかし，これは都合のよい神話に過ぎない．事象は時間の「中で」起こり，かつ時間は「何かで満たされ」ない限り空虚であると仮定する．この常習的考え方は本末転倒である．事象を基礎的現実 primary realities として，また時間を事象からの抽象概念—時間が時を刻んでいくような，規則的に繰り返される事象から主として導かれる概念として考えてみるべきである．事象は知覚される，しかし時間

> は知覚されはしない．空間も時間の場合と同じである．対象が空間を満たす fill のではない．なぜならば，初めから空虚な空間などありはしないからである．環境の中で変わることなく安定している面が，現実の枠組みになる（Gibson 1985, p. 109）．

コンパクトであるが重要な論述である．時間知覚は存在しない．なぜなら，時間そのものというものが存在しないからである．

ギブソンの生態学的知覚論の標的は，ニュートン物理学に暗黙に立脚した心理学である．他所で論じたが（河野 2003），一八世紀以降の物理科学はニュートン物理学をパラダイムとして発展し，現代物理科学はニュートン物理学を批判的に超克することによって成立したと言ってよい．心理学は物理学をモデルにしてきたが，現代化することなく，ニュートンの原子論的パラダイムの中に留まり続けているというのが，ギブソンの心理学に対する診断である．ギブソンは次のように述べている．

> 生態学の水準において持続と変化の同時性について理解し難いのは，おそらく古い考え方，すなわち世界で永続するものは原子であり，変化するのは原子の位置ないしはその配列であるとする持続性と変化についての原子論と結びついているからである．（Gibson 1985, p. 15）

すでに常識であるが，ニュートン物理学が描く世界は，空虚な空間と時間という絶対的枠組と，そこに収められた物質的実体，すなわち，原子からできている．実体は，それ自体は時間・空間から独立の絶対的存在とみなされ，宇宙はこれらの互いに独立で自己充足した実体たちから構成されている．実体の本質は，その実体が他の実体とどのような関係を結ぼうとも変化しない．空間と時間とは，それぞれまったく等質で，相互に独立した，また実体からも独立している絶対的枠組である．時間の経過はどこで

も等質であり，かつ直線的である．絶対時間とは時計によって測定される時間であり，それ自体の力によって，実体とは無関係に均質に流れていく．こうしてニュートンの世界観は，孤立した実体に対して，その外側から時間と空間の絶対枠組，及び，法則性が課されるという図式で成り立っている．それはプラトン的な世界観である．なぜなら，プラトンは，不断に変化する個物の世界にたいして，永遠のイデア的な秩序が個物の外部から課されると考えていたからである．デカルト，ガリレイ以来の近代科学がプラトン的であるのは，科学史の常識である．したがって，ニュートンにおいては時間そのものが実在する．

どの心理学と特定することは困難ではあるが，これまでの心理学の理論は，こうしたニュートン的パラダイムが無自覚に受け入れられていたのではないだろうか．それは，おそらく，心理学が近代社会の人間像の成立とともに生まれたからである．ニュートン的パラダイムは，単に自然科学だけのパラダイムではない．それは近代社会そのもののパラダイムと言ってもよいからである．すなわち，原子論，実体論は，無機的な自然に対してだけではなく，人間にも当てはめられてきた．すなわち，近代の人間観は原子論的であり，近代的な自然観と同型なのである．近代社会は，個人を伝統的共同体の桎梏から脱出させ，それまでの地域性や歴史性から自由な主体として約束した．つまり，人間個人から特殊な諸特徴を取り除き，原子のように単独の存在として遊離させ，規則や法に従って働く存在として捉えるようになった．近代社会においては，交換できない特徴を持つはずの場所は開発すべき単なる空白の空間となり，前近代的な社会が持っていた自然のサイクルや生活のリズムは均質な時間として管理されることになる．原子論的自然観と原子論的人間観は，歴史的に見れば，どちらが先とも言えない相互的な影響によって近代社会のパラダイムとなったのである．心理学はこの近代社会の人間像に則って誕生した．物理学がニュートン的（古典的）パラダイムをすでに超克しているのに対して，心理学は自

らの基盤を反省的に捉え直すことに立ち遅れた．つまり，ギブソンが批判したように，心理学のマジョリティにおいては，近代のパラダイムが前提としているような絶対的な時間と空間が自明視されている．そこでは，人間存在もまた原子のように無個性化され，脱リズム化され，脱場所化される．心理学者は，この点にしばしば無自覚である．このパラダイムを超克するには，大きな変革が心理学には必要であろう．

3.　出来事の心理学

先の引用にも見たように，ギブソンは「基礎的現実（実在）primary realities」を「事象（出来事）event」に求めた．本論では以降，event を「出来事」と呼ぶことにする．ギブソンにとって，時間，空間，実体は，根本的実在である事象から抽象された概念に他ならない．生態学的事象は絶え間なく変化し，流れてゆく．生態学的環境はさまざまな事象の連続的な推移として，すなわち，過程 process として記述される．

事象（出来事）や過程を実在の基本として捉える立場は，哲学においては特別に風変わりな考え方ではない．前著（河野 2003）で論じておいたが，過程の存在論の起源はヘラクレイトスやアリストテレスのような古代ギリシャに遡れるし，近代以降でも，ライプニッツ，ヘーゲル，ベルクソン，ラッセル，ホワイトヘッド，パース，ジェームズ，デューイをあげることができ，現代の分析形而上学と呼ばれている一連の議論の中にも，事象や過程を実在の基底として捉える考え方はマジョリティですらある．心理学においては，ジェームズやデューイのような心理学にとっても重要なプラグマティストたちの主張が軽視されてきたことの方が不思議である．ギブソンは，ヘフト（Heft 2001）が明らかにしたように，ジェームズからエドウィン・ホルトへと受け継がれるプラグマティズムの系譜の中にいる．行為と出来事を基本的な対とするプラグマティズムの伝統は，時間そのものや空間そのものといった主知主義的な概念を退けるギブソンの背景

をなしていたのである．

近代科学が前提とする等質で無限の時間とは，反復的な事象から抽出された概念にすぎない．したがって，「時間を知覚できるか」という問いは，時間を事物から独立した絶対の枠組として捉える発想から生まれてくる悪設定問題である．時間も，空間も，次元（座標軸）にすぎない．時間そのものを知覚することはできない．なぜなら，時間軸そのものなるものは存在しないからである．時間も空間もただ計測されるものである．時間は，安定した反復的出来事が，より長い出来事の中にいくつ行うことができるかによって測定される．時刻のカウントには，「主観的時間」とか，「客観的時間」とかいった区別はない．ただ，測定の仕方の違いがあるだけである．「主観的な熱さ」と「客観的な温度」という区別は不適切である．金属の膨張を用いた測定法と生物の身体を利用した生物にとっての重要性を尺度とする測定法の違いがあるだけである．どちらも客観的と呼んでよい．同じことが時間にも言えるのである．もし時間の知覚を論じるのであれば，「出来事のなかに時間を知覚することは可能か」，すなわち，「ある特定の次元に沿って，出来事から時間という性質を知覚することは可能か」という問いにしなければならないのである．

4.　運動変化と事象の入れ子性

さて，従来の哲学的時間論においても，知覚できるのは現在だけであり，未来は予測の対象であり，過去は想起の対象であるという議論が存在する．しかし，知覚が現在に限られているとすれば，その現在とは何であろうか．瞬間ではありえない．そのようなものは知覚できないし，そもそも瞬間ということの意味が分からない．完全に停止した時間のことだとでもいうのだろうか．それでは，瞬間と呼ばれるものが一定の持続であるとすると，どのような長さの時間になるのだろうか．いつからいつまでの区切りの持続が知覚されるというのだろうか．ギブソンに倣って，私たちは

時間の絶対的単位も，時間知覚の絶対的単位もないことを認めるべきであろう．事象の存在論を採用するならば，この事態をどのように理解すればよいだろうか．

ここで問題となるのは次の二点である．(1) 運動変化が実在するとして，それと時間とはどのように関わっているのか．(2) 現在，過去，未来という時制（マクタガートの言う「A 系列」）の区切りはどのようになされるのか．

まず私たちが検討しなければならないのは，運動変化という概念についてである．たとえば，まったく変化しないものにも時間は流れているのだろうか．自然法則は永遠に同一で，無時間的と言われるが（本当はそうではないと筆者は思っている），そこには時間は流れているのだろうか．あるいは，時間的に全く変化しない粒子があったとすると，そこにも時間が流れていると言えるのだろうか．ニュートン的に時間そのものが事物から独立して流れているのだとすれば，流れていることになるだろう．しかし，何もないところに，あるいは，あらゆるものが止まった空間の中に，時間だけが流れていると言われても空虚な概念しか持ちえない．運動変化から独立の時間性は想定不可能ではないだろうか．

そもそもそれ以前に，私たちは洋の東西を問わずしばしば時間を「流れるもの」に喩える．「光陰矢のごとし」「時は流れる」といったようにである．しかし時間を流れにたとえるとするなら，一体，何が流れているのか．今言ったように，あらゆるものが止まっていて，空虚な時間だけが過ぎていくという想定はニュートン的な誤った時間の概念化に思われる．そうした絶対的なものとして時間を考えることをやめ，世界に実在しているのは事象（出来事）であり，知覚とはその事象の知覚なのだと考えたときに，問題は改善する．運動変化とは事象のことであり，時間とはその事象の中の変化の相対的比較から生じると考えるべきではないだろうか．速度が相対的，加速度的であるように，時間もそのようなものとして考えるの

である．ギブソンは，知覚とはスナップショットを撮るようなものではなく，時間的に長いスパンをもった探索によって環境中の形を持たない不変項（formless invariant）についての情報を取得するのだと論じていた（Gibson 2004, p. 78, p. 346）．これは取りも直さず，瞬間的な実在などあり得ずに，ずっと持続する過程こそが実在しており，その過程の中に一定の区切りをつけられるような事象が複雑に組み合わさりながら存在する．その事象こそを知覚しているのであり，その事象を比較したときに時間が測定されると考えるべきなのである．

では，どのような事象が知覚の単位となるのであろうか．これについては，意外にも歴史学が参考になるように思われる．フェルディナン・ブローデルに代表されるアナール学派は，構造歴史学を打ち立てたことで知られている．この構造史の考え方によれば，歴史は単純に年表のように区切れるわけではなく，歴史の中にはさまざまな時間的スパンを持った出来事が重層的で，入れ子状態で存在しているのである（Braudel, 1991–1995）．ある時代には，ちょうど海の中には速度の違う海流が層をなして動いているように，さまざまな長さの出来事が重層的に生じている．

政治的な出来事は，比較的に短く，常に変動し生成する．従来の歴史学はこの政治の変化にばかり焦点を当てており，その意味で最も表層的な次元での歴史であった．しかしアナール学派が目を着けたのは，数世紀に渡ってほとんど変化しない生活形態や商業活動，ゆっくりと成育する産業資本などである．歴史は重層的であり，その表層部では政治的な事件や出来事が起こっては消えてゆくが，その底には，もっとゆっくりしたリズムの中期的持続である社会史・経済史が見出せると，アナール派は指摘する．さらにその中期的持続の奥底には，変化がもっと緩慢な，ほとんど変わらずに持続しているような時間の層が存在する．たとえば，政治制度の歴史や文化人類学が追及するような，社会の基底的特徴がそうである．これは地理学的時間と呼ばれる．こうした重層的で，入れ子状の運動変化の

概念は心理学にとっても有効ではないだろうか.

私たちは「現在」が存在するとか言うが，一体，何が現在であるのだろうか．どこからどこまでの範囲が「現在」とか「今」という単位になるのか，最初から確定されているわけではない．高校卒業以来，久しぶりにあった友人から，「今，仕事は何やっているの」と問われたときの「今」と，大学の職員から「今，先生はどこにいらっしゃいますか」と呼び出されたとき「今」と，将棋をやっている相手から「今，どこに指した」と確認されたときの「今」とでは，持続の範囲が違う．最初のケースはこの数年から十数年をさしているのだし，二番目はこの数時間，三番目はこの数分である．もっと長い歴史学的視野をとってみれば，「今の社会」の「今」とは，この数十年，数百年に渡って進行している「今」であろう．あらゆる事象は入れ子をなしていて，ひとつの事象の中にはより持続の短い事象が含まれており，そのまた事象の中にはさらに短い持続の事象が含まれているだろう．私の指の動きはひとつの出来事であるが，それは「パソコンを打つ」という事象の一部であり，「パソコンを打つ」という事象は「論文を書く」というより長い持続の事象の一部をなし，「論文を書く」は研究をするというさらに長いスパンの事象の一部をなしている.

事象はあらかじめ自然に切れ目が入って，アプリオリに個別化されているわけではない．ある事象はさらなる事象の一部として包括されることで，過程として進行していく．ギブソンによれば，環境を構成している事象には定まった単位はなく，時間スパンに関しても基本単位があるわけではない．環境中に実在している諸事象は，トランプのカードのように，最初から離散的に存在し，その間に順序関係があるようなものとして考えられてはならない．そのように考えると，世界には前後順序の関係性しかないことになり，運動変化が取り除かれてしまう．つまり，世界には推移と過程のない順番の秩序しかないことになってしまう．アナール学派のように運動変化を，重層的で入れ子状の過程として捉える必要がある．運動変

化は確かに世界に実在するが，その中におけるどのような持続を取り出すかによって「現在」というものは異なってくる．変化に乏しく反復される地理学的時間は，永遠の現在であるかのように準 –無時間的に存在し，そのようなものとして知覚されるのであり，激しく変化する事象は変化の緩慢な部分との対比で「早い」時間的推移として知覚されるのである．

5.　時制の問題

さて，こう考えるならば，現在というものは，瞬間ではありえないことはもちろん（瞬間なるものは存在し得ない），特定の絶対的な持続単位をもっているわけでもなく，さまざまな持続の幅を含んでいることになる．しかし，現在がどこまでも現在であって，過去にならないでいるわけではない．宇宙の始まりからその終わりまで，ひとつの現在とするには，それこそ神の視野からのまとめあげが必要である．私たちにとって，実際に，環境中で何かの変化が起きたときには，何かが過ぎたこととして，すなわち過去として捉えられていく．そこで第二の疑問，「現在，過去，未来という時制の区切りはどのようになされるのか」という疑問に取り組むことにしよう．今述べたように，環境の中にはさまざまな持続と変化が実在している．その連続体の中に「現在」と「過去」という区切りが自然に入っているわけではない．こうして何が現在であるかについて決定的な基準がないならば，「～がもはやない」という過去としての線を引き，現在と過去を切り離すのは何であろうか．過去経験が「すでにない」「すぎたもの」として想起させられるのは，どのようにしてであろうか．

ここでも，順序関係そのものが，現在と過去という時制の区切りを生み出さないことは明らかである．たとえば，コンピュータの中に記録した情報にすべて日付がついているとしよう．これらの情報を順序として並べることは，コンピュータにも可能である．しかし，ある日付の情報を検索して，画面上に提示したからといって，それでコンピュータが何かを想起し

たことにはならないだろう．想起とは，ある出来事を「すでにない」「すぎたもの」として捉えていなければならない．コンピュータ内部のナンバリングや名札付けには，過去という意味が欠けているのである．同様に，かりに脳に記銘されている内容に順序関係が記されていても，それだけでは，その内容を過去のものとすることはできないのである．したがって，過去の記憶が脳内に「保存されている」とか「貯蔵されている」というのは，不適切な比喩である．ナンバリングを保存したり，貯蔵したりできても，過去というものは保存したり，貯蔵したりすることができないからだ．記憶心理学の用語を使うのであれば，意味記憶や手続き記憶は学習したものであったとしても，その内容に過去性がない．それは反復されている行動にすぎない（意味記憶もそうである）．エピソード記憶の内容だけが時制としての過去性をもつ．エピソード記憶は過去の出来事として想起される．しかし，エピソードを過去たらしめているのは，前後順序関係でないとすれば，何であろうか．この点を明らかにできないでいる認知理論や心理学は，人間の記憶について語ることはできない．

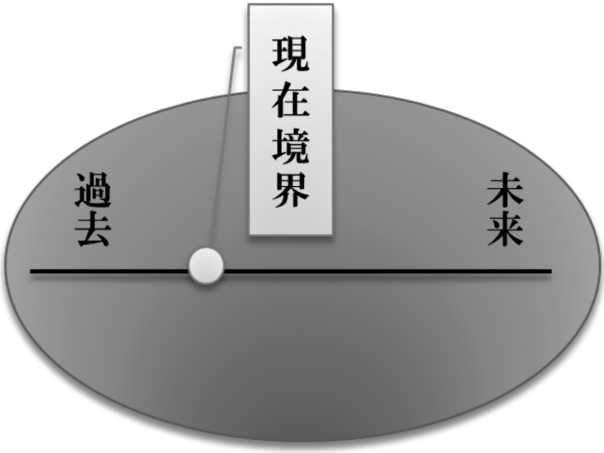
生態心理学を専門とする松島恵介（2002）は，生態学的立場から記憶と自己との関係について重要な指摘をしている．松島によれば，過去経験の過去性，すなわち「もはや…ない」という性質は，記憶内容にあらかじめ書き込まれているのでも，記憶に後から順序関係が付与されるものでもない．過去経験の「もはや…ない」という性質は，想起する主体がその都度，現時点において与えるものというのである（松島 2002, p. 43）．たとえば，「今日は楽しい一日だった」といった過去表現が成立するのは，その発話をしたまさにその瞬間だというのである．繰り返すように，環境の中にはさまざまな持続を持った運動変化が実在している．しかしその連続的な過程の中に，あらかじめ「現在」と「過去」という区切りが入っているわけではない．その区切りを入れるのは人間なのである．「今日の懇親会は楽しかったなぁ」と口に出すのは，その楽しい会が終了し，一息つい

て，もはや会場に人気が無くなり，楽しい笑い声が消えたことを認めたその瞬間なのである．「楽しかったな」という過去形をもたらすのは，その発話である．会場からは徐々に人が去っていき，賑やかさはだんだんと連続的に落ちていく．そしてある時点で，「楽しかった（でも今は楽しくない）」という区切りを人間がもたらすのである．ギブソンは次のように書いている．

> 現在の経験と過去の経験との二分法の力は，おそらく言語に由来したものであって，その場合，我々は「あなたに会う」のと，「あなたに会った」の，あるいは「あなたに会っている」と「あなたに会っていた」の中間のことをいうのは許されない．動詞は現在形か過去形しかとらない．相手が視界にいようといまいと，相手についての自分の連続的意識を言い表す言葉がない．（Gibson 1985, p. 269）

私は，現在の経験と過去の経験を区切るものが言語の力であるかについては留保したい．しかしこのギブソンの主張は，哲学者の大森荘蔵が，『時は流れず』（1996）という論考の中で主張したかったことに類似している．大森は，時間とは，現在と過去とを境界づける図式であり，これそのものは，流れたりしないと述べた．ここで大森がいう「時間」とは，私たちの言葉での「時制」のことである．彼は，時制が運動変化に対する線引きであることを指摘したのである．大森にとって時間とは，以下の図のように過去と未来を包含するものである．

したがって，何が現在で何が過去になるのかという時制は，人間がその「現在」を設定しなければならない．「私はかつてある女性を愛していた」という場合，もしも，その女性への愛情をありありと感じているならば，それは「いまだ愛している」のであって，「愛していた」と過去形にすることはできまい．愛が完全に失われた，その人を愛する気持ちそのものが



理解できなくなったときに，その愛は過去のことになったのである．

しかし，私たちは，世界の運動変化の中で，どのような出来事の途中でも，いつでも自由に，恣意的に線引きができる訳ではない．注目している運動変化そのもののなかに，自分が身を晒している運動変化そのもののなかに，時制の線引きを可能にする何かのきっかけやしるしが存在すると考えるべきであろう．時制の線引きは，自然の中にあらかじめ絶対的に与えられているものではないが，かといって，私たち主観が絶対的に決定できるものでもないのではないか．この点については，これから考察を進めなければならない．

では，「いまだ来ていない」という未来は，世界の中にいまだまったく存在していない無なのだろうか．存在していないものは，知覚することはできない．予想や計算をするだけであろう．もちろん，私たちは遠い未来の不確定な姿について，知覚するのではなく，知的に予測し，推論する．しかし他方で，私たちは，運動変化の直近の未来の姿を，今起こらんとする変化の可能性を，知的にではなく，知覚的に捉えているのではないだろ

うか．私たちの世界は，その「現在」と呼ばれている姿の中に，変化していない過去からの残留を見ると同時に，今まさに変化を起こそうとしている何らかの潜在性を予知しているのではないだろうか．私たちが移動している自動車を見るときに，遠方からこちらに向かってきた過去を見るのと同時に，今自分たちの目の前を通り過ぎて，この道路の先へと進んでいく姿を知的な予測としてではなく，知覚の延長として見ていないだろうか．私たちは，世界がまだ終わることのない持続であり，この自分の目前で生じている事象を含み込んで，さらに展開していく事象を世界が潜在的に湛えていることを見ているのではないだろうか．

未来とは，過去からの現在へと続いてきた線の先のことではなく，むしろそうした直線的な時間表象が暗黙に前提としている運動変化への潜在性のことなのである．未来の知覚とは，現在の運動変化の先にある潜在性の予感である．したがって，私たちは，変化するものとしないものの相対性，及び，運動変化の顕在性と潜在性の比較の中に時間の知覚を見るべきであろう．

曖昧で思弁的な表現で構わないならば，暫定的にこう結論できるだろう．過去知覚とは，ある運動変化（事象）の終焉の知覚と，その時制としての線引きである．他方，未来知覚とは，現在の世界の潜在性の知覚である．したがって，過去知覚と未来知覚は全く非対称的であり，「時間の流れ」という同一線上にある何かを知覚することではありえない．それら二つはまったく別の知覚のあり方なのであり，区別されるべきである．

謝　　辞

本論は以下の科学研究費補助金による研究成果である．

参考文献

Augustine『アウグスティヌス（世界の名著 14)』山田晶責任編集，中央公論社，1968.

Bergson, H.『時間と自由』中村文郎訳，岩波文庫，2001.

Braudel, F.『地中海』1–5，浜名優美訳，藤原書店，1991–1995.

Gibson, J. J『生態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る』古崎敬他共訳，サイエンス社，1985.

——.『直接知覚論の根拠：ギブソン心理学論集』エドワード・リード，レベッカ・ジョーンズ編，境敦史・河野哲也訳，勁草書房，2004.

Heft, H. *Ecological Psychology in Context: James Gibson, Roger Barker, and the Legacy of William James's Radical Empiricism*. Mahwah, N. J.: L. Erlbaum Associates, 2001.

入不二基義『時間は実在するか』講談社，2002.

河野哲也『エコロジカルな心の哲学』勁草書房，2003.

松島恵介『記憶の持続 自己の持続』金子書房，2002.

McTaggart, J. "The Unreality of Time", *Mind* 17（1908): 457–474.

大森荘蔵『時は流れず』青土社，1996.

基盤研究（A)「知のエコロジカル・ターン：人間的環境回復のための生態学的現象学」（課題番号 24242001 ）

基盤研究（B)「生態学的現象学の技術哲学的展開：生態学的に優れた人工環境の構築に向けて」（課題番号 21320003–1）